

鶴だより

釧路市動物園 ふれあい主幹
松本 文雄



12月に入り、給餌も始まり、丹頂の里にもツルが集まり始めています。ただ、まだ、給餌場には20～30羽程度に留まっています。今年はすでに初雪は降りましたが、本格的な降雪もなく、畑には土が見えています。阿寒の里に来たタンチョウも給餌場に集まる前に、周辺の畑で餌をついばんでいるようです。

12月5日に北海道が行うタンチョウ越冬分布調査が実施されました。阿寒の給餌場には30羽程度でしたが、それより北に30～50羽程度の群れが3つも見付き、阿寒の里周辺では150～160羽のタンチョウがいるのではないかと考えられます。

2015年度から始まった環境省の給餌量削減事業により、給餌する量を少なくしていることもあるかもしれませんが、周辺の畑の環境の変化も大きいようです。阿寒は野菜農家のほかに、酪農も盛んです。酪農家の管理している畑の多くは牛に食べさせる牧草です。ただ、牛には牧草だけでなく、栄養価の高い配合飼料も与え、その一つがデントコーン（飼料用のトウモロコシ）です。このデントコーン、以前は輸入が多かったのですが、近年は自前で栽培するところが増えてきました。デントコーン畑は機械で刈り取りを行います。刈り取り後の畑にはこぼれたコーンなど、ツルの餌になるものが多くあります。このデントコーン畑の増加が、ツルの餌場を増やしているのです。

デントコーン畑の増加は阿寒だけでなく、道東各地で増えています。そのため、この時期でも根室や釧路の北部にタンチョウの群れが残っています。いずれ、雪に覆われ、餌が取れなくなれば、給餌場に移動してくると思われるのですが、農業形態の変化が秋のタンチョウたちの行動にも影響を及ぼしているのです。



上阿寒のデントコーン畑のようす

タンチョウは 白目をむかない

釧路市動物園 ツル担当主査
吉野 智生



ツルセンターや動物園でお客様を案内したり、歩いたりしていると、時々タンチョウに、「こっち向いて」などと声をかけている方がいらっしゃいます。さて、タンチョウがこちらを向くとはどういう状態でしょうか。

鳥類はエサや外敵を見つけるために視覚が発達しています。眼球は大きく、頭蓋骨（とうがいこつ）に眼窩（がんか）という凹みがありますが、そこにすっぽりはまり込むようになっています。何かを見る時、人間は視線が動きますが、鳥は眼ではなく首を動かします。また人間の眼は顔の前方にあります。ほとんどの鳥類では顔の外側という横についています。なお、どうでもいい話ですが、鳥は人間のように眼球を動かさないので、白目をむくことはありません。白目をむいているように見える時がありますが、それは瞬膜という、まぶたの内側にある透明または半透明の膜が見えているのです。

例えばまばたきをしたり、水中に顔を入れたときに目を保護したりする時に見えます。

両眼でものを見ることを両眼視と言いますが、この場合一度に見渡せる範囲（視野）は狭くなります。代わりに物が立体的に見え、距離感がつかみやすくなります。

例えばフクロウやタカ・ハヤブサなど猛禽類の眼球は、前方を向いているので両眼視できる範囲が広く、獲物を追いかけて捕まえるのに役立ちます。スズメやハトなどは、顔の横に目があるので両眼視できる範囲は狭いのですが、その代わりに片眼で広く見渡せるので視野が広く、敵をすぐ見つけることができます。

タンチョウも小鳥と同じように眼球は顔の外側についているので、両眼視できる視野は猛禽類より狭く、片眼で周りを観察することに向いています。時々首をかしげているのは上空を見るためです。歩くときに首を振るのは、移動時に見ている風景がブレないようにするため、よく見ると頭の位置はあまり変わりません。彼らが横を向くのは、実はきちんと見るためなのです。そのため、実はすでにお客様の方を向いていることとなります。なお、人間の方に近づいてきて顔を正面から向けたということはつまり、つつくつもりだということです。おそらく頭は真っ赤になって興奮しているでしょう。危ないので、近づいたり柵に手を触れたりしないでくださいね。

